

○ 明禪寺の合戦

第四階 戦争益 第四子

永禄十年(一五六七)の春四月、備前を攻畧せんとする松山城城主三村修理亮元親の古軍とこれ阻止せんとする岡山城主宇喜多和泉守直家(当時沼の城に居る)の防禦軍とが備前の龍の口山の南の野を舞台に雌雄を争つた物凄、戦である。

この衝突の原因は前年元親の父家親が美作を没畧中久米郡奴村(今備前所)の興禪寺にて直家より刺客によつて暗殺せられた事件より三村は深く宇喜多氏を怒み相反目のうち起つた復讐戦なのである。

家親最期の有様を福水記にその左の文獻によつて簡記すると  
備中の岡鳴輪(興禪)城主三村修理亮家親は毛利元就の援軍を引き入れ、松山城に立籠り高麗を討取つてこれに替り、備中勢を催して備前の國八攻め寄せんとした。この時宇喜多氏は備前と美作半國を手中に收め毛利氏には不慮である。家親は毛利氏に加勢もあつて六千合騎の重兵を引率して美作へ押寄せ、奴村の興禪寺へ本陣を置いたのである。直家は情報

を耳に不安から思ひ、その臣遠藤河内を召して「御辺に在る所を頼み如何にもして思ひより家親を討ち取らばその恩賞として一萬石を如増するであらう」と。河内は「此の修理と謀計をめぐらし首尾よく使命を果せませう」といつて御前を下つた。二人のいざなひは本陣の腹

に同羽織、短鉄砲に玉薬を込めて懐中に忍ばせ、奴村へ向つた。時は八月十八日家親は寺前の城を攻落して興禪寺へ入り戦塵の疲勞を休めていた。遠藤河内は夜に入つて寺の廻りをみまると、後方の方に大竹藪

がある。道々に鼻紙をつけて本堂に近々寄つてみると書院の端端の火が障子に映つて輝いてゐる。庭先には篝火を焚いて番人姿がみえた。河内

はすかさず篝火の所へ立ち寄つて「若々は御役目御苦勞であらう」と傍輩のように見せかけた。下役であるから誰れも聞かざるものも無い。

それから縁にのぼり障子のそばへ近づくといふ立間すると軍の手配を評定してゐる。そのと人差指に咥をつけて障子を破り覗いて見ると、正面に家親がすわりその傍に障子にのぼり座頭一人、末座に物頭とも四五、六人居並んでゐる。河内は懐中から鉄砲を取り出したが火繩の用意がな

いことに氣付いた周章したのである。もとの篝火の所へ戻り「今宵は浅寒のことでごさるのう」といへば「此は何の役を召れるか」と問は返した。河内は「夜廻りの番でござる」といひさま着てゐる羽織の裾を焚

火に入れて火をつけ、火繩を引移して再び本堂の縁にあがり、さき破つた障子の穴から覗いを定め家親を目かけて打ち放つた。覗いて見ると家親はうつ伏になつて倒れたので急いで走り出し大竹藪のなかへ逃げ込んだ。耳をすまされ客子を窺ふてゐる。堂内は遠かに騒擾しくな

り上を下へと大混乱をきたしてゐる。致命的打撃を食へた家親は、あつた。直家は豫め付置いた見張りの使者もほどなく帰つてきて家親の討死をつぶさに復命したので直家の喜ばは一方ならず河内には一萬石

を宛行し浮田の苗字を興へ、弟の修理にも五ヶ石加増の沙汰があつた。かくて三村の軍勢は主君の屍を擁して松山城に帰陣した。家親の嫡子

元親は悲しみと宇喜多氏に對する憎悪のうちには松運寺で深沈な葬儀が行はれた。松運寺は備中高梁駅の北背後にある寺院で、後ち家親がこの寺で自及する運命にな

らうとは夢にも知らなかつたであらう。寺の庭園は小堀遠州の築造といはれる。本堂の天床は宇喜

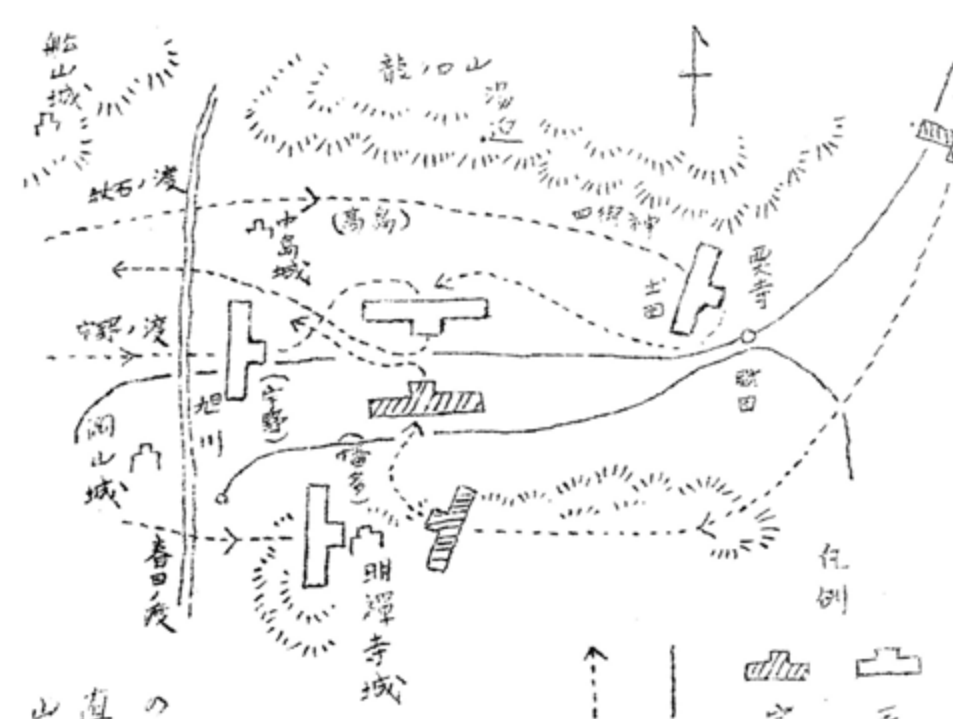
多秀家が朝鮮征伐の時の御座敷の御天床を障陣の際を寄進したと傳はられるものである。

家親の尸祭が終ると参列してゐる弟の猿掛城主元祐、同謀城主三村

家親の尸祭が終ると参列してゐる弟の猿掛城主元祐、同謀城主三村

宮中少輔元範、鬼身城主上田孫次郎實親、家親の妹の舅幸山城主石川源左衛門久智を始め諸城主一同を城中に招いて密議を凝らし備前に討つ防備態勢を整えた。庭敷城（今の徳川城跡）の創築はさきに詳しく述べたように文献はないが歴史上の考察から推してこの時に三村氏が早急に築城工事をしたものと思はれる。レケレ先づ岡山の全先共次郎宗高、船山の須々木豊前、中島の中島大炊助の三城主と結び備前に進出した。これよりさき直家は沼城防備のため三敷山の一角明禪寺山の城に派兵を置き警戒した。三村勢は風雨の烈しい夜に來じて明禪寺城に夜襲をかけた。これに陥れ福屋共七郎、葉師共七郎の二部将を討つて二百五十余騎を添えて守備せしめた。直家は船山、中島、岡山の三城將を説いて味方とし、更に明禪寺城の福屋村氏に報告したので元親は翌十年の四月出兵に意を決し、二万余の軍勢を引率して船山を進軍した。

△明禪寺の合戦畧図



の渡、春日の渡を渡り旭川の牧石の渡、宇野直家は夜襲に來じて五千余騎を討つて先づ山間を逃げて明禪寺の城を奪回した。城兵を説いて味方とし、更に明禪寺城の福屋村氏に報告したので元親は翌十年の四月出兵に意を決し、二万余の軍勢を引率して船山を進軍した。

は敗れて瓶井山にのたがったが偶夜に明方三村方の右翼軍が元祐の指揮する先鋒が應援のため明禪寺山に入ると三敷山にさしかかると頃、この敗兵と出逢い驚いて所へ宇喜多の追兵が急に迫り、明石、加川、辰船、宇喜多忠家等のために高地から散々に射撃を受けてひとまたりもなく敗走し、主将元祐は忠家の軍と奮戦し四十余騎を失い、元祐も亦退却中深手を負ふて全先共次郎の舎兄、能勢修理のために門田の徳吉寺の東方で討死した。元祐は元親で小田郡後掛城に在る養子に任じた人である。墓はもと高六高等学校の敷地にありたが学校建設のために北側の田圃のなかに移した。俗に田中神社といふ祠に奉り脚氣に罹る者多しといはれている。高六高等学校は教育制度がなほ不十分で廢せられいまは朝日高等学校となる。

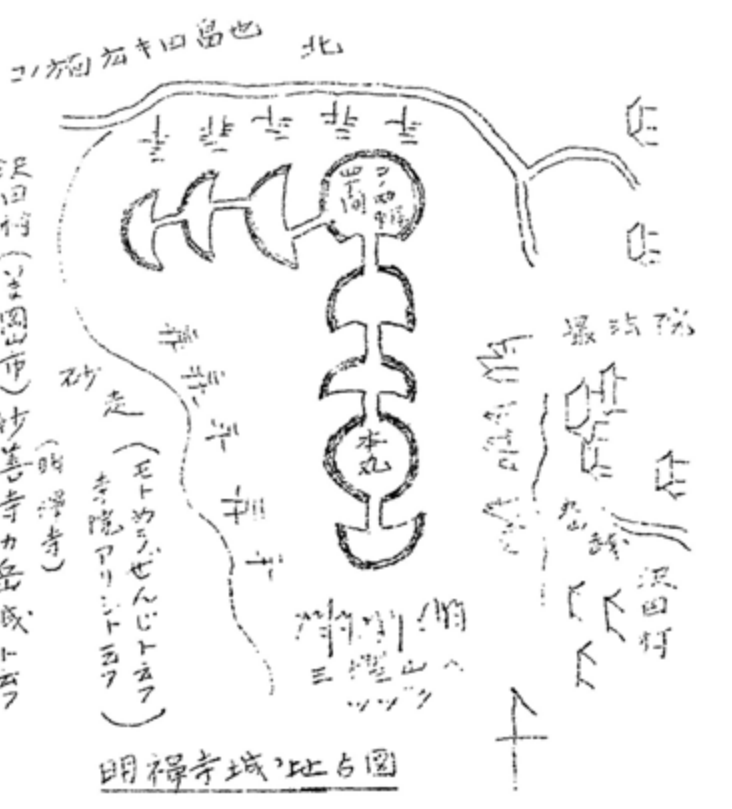
左翼軍は元親の主力部隊で編成し直家の本営沼の城を覆滅すべく、と真夜中に牧石の渡を渡り龍ノ口山の南麓に泊り進み湯迫を過ぎ四御神あたりにお頭がつかした頃、遠く南方に響く明禪寺山の方に火燭のあかりをみて大いに驚き味方の異変を知り、俄みに鋒を轉じて八幡の部落に引き返した。夜は全く明けはなれて中央軍と戦れた右翼部隊とが合して原尾島、河原の野にクギつけられて激しい白刃戦が展開されていく。元親は勝に乘じて攻撃しつづける敵軍に新守の精銳をして一斉に矢箭を放ちよく善戦したので味方と一時有利に導いたが作戦に阻撓をきたした結果、数回に亘る宇喜多軍の逆襲に散々に打破られ総軍は大崩れとなり多数の死傷者を戦場に遺した。ま、祇園、今在家の線まで敗退した。総大将元親は将に潰れせんとしたため、家臣に諫止せられ僅かに身をむすつてのたか数十名の部下を従えて急遽松山へ帰つたのである。この合戦は宇喜多直家一代の大勝戦にしてこれより武威を近隣に振ふ天正元年には岡山城を構築してこれに移つた。今日岡山の繁榮の基礎を打ちたてた開祖である。在にこの合戦を備前の開ヶ原というのである。

橋多、高島、宇野の三ヶ村（いまは岡山市）は古時の激戦地にして三村軍の戦  
 没者も合葬した饅頭形にお盛りした首塚といはれるものか、昨聞に  
 存在している。そのうち中筋にある首塚には左の石碑が建てらるる

その銘に  
 塚在備前上道郡中島村北永祿中三村兵為浮田氏所敗殲其所戰死群臣  
 屍也三村時屬毛利氏及浮田氏與和為集僧尸塚近塚湯迫四御神土田三  
 村每歲七月十四五日兩日夢炬火於其山以所冥福御人編曰萬燈至今不廢  
 蓋兆域方大乱早生焉人莫識其墓大森成愍之謀立石表之不果而返其父尚  
 則屬文於余欲成之志因崇三村家親備中松山城主也將出兵美作直家使  
 遠藤某殺之家親子元親汝復父讐圍直家攻妙善寺（明禪寺）皆乃將兵二万入  
 備前戰于比郊大敗定為可哀浮田氏七備人忘之而此塚則尸祭不絶一村群  
 臣と靈無手可慰笑及為 銘曰  
 蝸角戦争 孰有輸贏 魂其安焉 千紀萬燈

弘化二年乙巳 蓋欽 浪華 後崎 彌揆 御人 大森尚則建  
 とある。備前と備中の東部地方には毎年蓋蘭盆の七月十四十五の両  
 日の夜に精霊の迎いと稱して門先には火を焚く風習がある。他の地方  
 ではみらねる。行事の一つである。これはいまでも盛大に行はれてい  
 湯迫の萬燈会から起つたものである。

○常山城の合戦  
 常山は玉野市の北部、濹崎莊内に跨る標高三百七末の孤立した山岳で  
 其の形状が富士山に似ていふので鬼島富士の異稱がある。頂上には城址が  
 ある。天正の頃松山城城主三村氏の出城がある。天正三年松山城落城に  
 城主三村修理亮元親は自刃してなくなつた。



明禪寺城址の図

浪田村（岡山市）妙善寺カ岳城ト云フ  
 所者ハ城カツテ云フ城主不知萬灯由  
 末三ノ宇喜多ノ出城ト云フ（古図による）

本營を甲浦の城山に、徳井田元清を濹崎の鷲尾山に、突戸陸家を左の  
 鬼城に、又三村兵衛義成は二千余騎の將として眞先きに到着し、湯崎に、其の子孫  
 三村孫兵衛義成は二千余騎の將として眞先きに到着し、湯崎に、其の子孫  
 太郎義兼は千余騎に、宗津、迫川の線に屯営した。小早川登重は山村に  
 陣して千五百余騎を二手に分けて豊岡に進み、浦野原勝は二千余騎にて  
 用吉らう宇藤木にかけ陣をとり、機り熟するのを俟った。  
 城中にては大將上野肥前守隆徳は家臣を母の尾丸に呼び集めて軍の評  
 定を議した。家臣どもは孤立無援の城によつて毛利の軍勢を引き受ける  
 ことは余りに無謀なれば一旦恥を忍べ、四圍へ落延び、他日を期し給へ。

いとり最後まで踏み止まつて毛利の  
 大坐に抵抗したのが常山城主上野肥前  
 守隆徳である。隆徳は元親の妹婿にレ  
 る三村氏の兵を毛利氏に反するや、讃岐の細  
 川氏に援兵を乞ひ、嫡子源五郎高秀を人  
 質として送り、松山城後詰の計出であつ  
 たが、源五郎高秀は空しく返つてきた。  
 毛利方に降参したことを切齒し、城兵  
 は小勢ではあるが籠城して毛利氏の大  
 軍を引き受けて潔く討死する覚悟を  
 決めたのである。



と一回諒めたが隆徳は頭をふり、「われ毛利家に対しは恨みあつて背きたり然るに上方を始め四國九州諸方の味方は合國とこのはず、事全く志と違ひ元親は自害し一族を多く討死して三村家は既に滅び、われ獨り存命して存にの面目をあらん、所詮吾等一門は当城を執に滅び、死せんのみかの命惜しむものは何方へなりと落ち行き結へ」と覚悟のほどを沃めた態度に家臣たちは返す言葉もなく、夫々部署についで籠城の手配をしたが、存及には城を出て敵陣に降るもの、又小舟に乘つて海に遁れしものもあり、二百余騎たらずの城兵はおい／＼に減つて百余騎に在つた。毛利方が城を十重二十重に包圍し水も浅らさぬ陣形を布いたことは城兵の脱出するを防ぎ籠一匹も逃さず皆殺しにせんとする戦法に出たのである。六日の朝毛利方の先鋒浦野宗勝の軍勢を戦は挑まれ、大手の木戸あり乱入し二の丸に攻め寄せ勢を上げた。隆徳は最早覚悟の上である。少くも騒がず、明日の朝は七矢倉にて一族諸共腹をみき切つて名を後世に遺さんものと静まりかえつていた。その時毛利勢は城中に闇の聲のあがり、油断せず北麓の共曾呂に廻つて森林に逃げたのである。まゝかと思ひ、油断せず北麓の共曾呂に廻つて森林に逃げたのである。みなぐり捲いておめを叫んで城中に攻めのぼつた。隆徳は大声をあげて「此多年毛利家に対しは怒みあり元親謀叛の主張者は全くわれならず、元親無下に生害に及び、われ生き何人の面目をあらん、一日も早く此地に赴くべし、いざ御免せん」とて鎧をなげみけ、腹帯を引きみけ、經文のしのぎを鋒巻にし鉄砲を取つて躍り出た。二ノ丸に隙間をなす、放ちかけたので猶子高秀は平常強弓を好んでいたのをとつて射みけた。又舎勇の小七郎高重も鉄砲を持つて散々に射みけた。この三人の策道具にて討取つたものは数を知らず、この手勢に毛利方は気を吞まれて

その日は退いて陣中に引き揚げてしまつた。明くれば七日の曉に城内では最後の酒宴が催された。その多くは女性の聲にれて、此はこの在り名残りを惜むのである。夕方になつて再び毛利勢は城に南壁して攻めた。酒宴は終り城兵はわれ先にと鉄砲を論を以つぎげ、城門に出みけた。二の時隆徳の継母当手五十七歳に在る

○常山城跡



凡例

1	梅尾丸	六百坪	12	衣無井戸	
2	梅尾二ノ丸	五百坪	13	東二ノ丸	百二十坪
3	主母丸	二百五十坪	14	東三ノ丸	百坪
4	天神丸	二百坪	15	矢竹丸	二百坪
5	北三ノ丸	二百二十坪	16	矢竹三ノ丸	百五十坪
6	北二ノ丸	二百五十坪	17	物心門二ノ丸	二百五十坪
7	本丸	七百坪	18	惣門丸	三百坪
8	池		19		
9	千人岩		20	大手惣門	
10	腰掛岩		21	馬場	百六十間
11	兵庫丸	百坪			

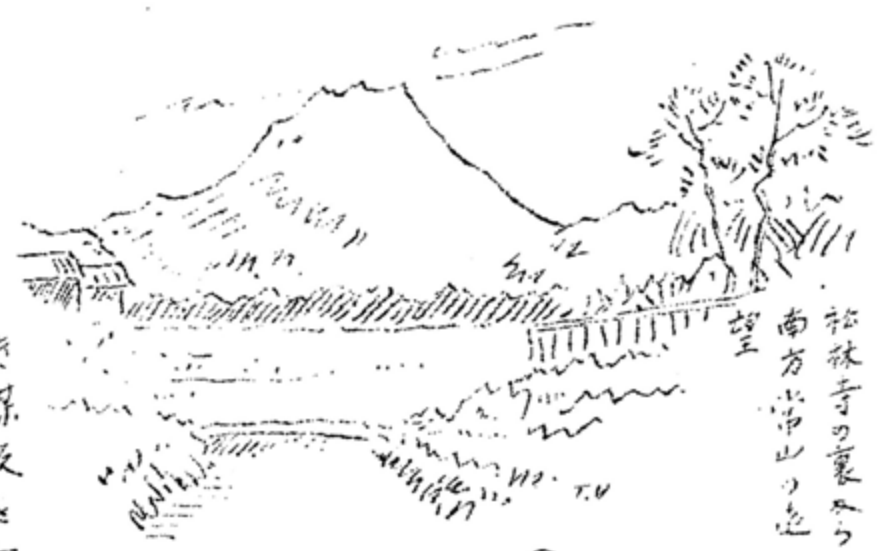
(第四輯戰爭篇八波の合戦、第六輯支那書篇高秀安参照)

る憂目をみることも前在の業因深みならず、隆徳芸州に遠恨を言み入道せらわし、心を只在にも物憂に思ひ、腹切る今日をみるならば目く心も暗むべし。暫時も後に残らんよりは先だちて自害を遂ぐべし」と縁の柱に刀の柄を突きつけ、腹を突きさした。傍にいた隆徳は走りより

逆罪とは心得たが詮方なしと命錯し首を落した。嫡子の高秀は生年十五  
歳は上上の御令錯仕りたくは候へ共少年の故御心掛りに思ひ結ふべし逆  
には候へ共御先腹仕らん。と云うたので隆徳は扇を閉き、おおぎ立て切  
な子存ばら神妙なりと顔をつくづくと打眺め、盛りも待たぬ花紅葉令  
嵐に散り果つるあはれ果敢なき世の習ひ。と詠じ暫し袖をぬぎ腹十文字に掻き  
秀も共に涙に咽んだが、三途の先がけ仕ると押肌をぬぎ腹十文字に掻き  
切つたので、隆徳はつつと立つて首を刎ね、二刀差し通して押伏した。  
次に隆徳の妹十六歳になる姫君がある。本莊鼻高山の城主は隆徳の弟で  
ある。あるにこれに落進びよとさとしたが、姫君は思ひもよらなふことと  
老母の抜きたる刀にて突き差し、同じ枕に打伏した。  
隆徳の妻は今年三十三歳になり元親の姉にして家親の存在中に嫁して  
三村と上野両家の連鎖となつたのである。この内室は男子にもすべた  
勇者で旧此は武士の妻となつて最後の時にのぞんで、敵一騎も討たずし  
てのみすみす自害するも口惜しいことかと、鎧を取つて打ちかけその上  
怪帷子(ききま)をかたがり死んじ着せぬ衣、逃れなどのききまを著上げ帯をしつかりと結ひ、  
白綾の鉢巻をしめ、國平の打つた二尺七寸の太刀を佩き、丈とひとしい  
黒髪をうち散らし、三将甲の緒を紅の薄衣の上にかけ裾を引きあげ、腰  
に二結び白柳の長刀を小脇にかひ込んで右場へ躍り出たので、春日が扇  
を初めとして他の局も皆これに繞りて飛んでおり、「こは如何なる御事  
や、さなきだに女は罪深く成佛せずと羨はるを、珠更修羅の業は如何  
鬼心結ハヤ」とく鎧の袖に取りつけば、まろくと打ち笑ひ、「御身達は  
女性のこと、何國へなりとも一度忍び給へ、自らは邪心一女と観念し  
この戦場を西方浄土とし修羅の苦も、極樂のいとなみと思へは何に  
苦しみるべきぞ」と袖よりきつて出て行けば連も散るべき花である。

同日崇に誘はれて三途のお供をいたさんと、髪を乱して鉢巻し長緋の袴  
を提ねて三十四人の女房連はれ先きにとかけ出た。  
この時敵將の浦野宗勝は大音聲に「城兵女に姿をたえ寄手を欺くと覚  
えたり、これ女の如き計畱孫子の叛する所、あなどつて不覚取る所」と  
下知した。内室は立向ふ敵の本見十郎左衛門を難ぎ伏せ、本太五郎を衛  
三宅勤兵衛に手負はせた。又城中から土倉兵庫、池田新兵衛、近藤本五  
郎、井意仙等の八十三人鋒先を揃へて城外へ進み出て宗勝の老練七百余騎  
の勇なかへ飛込んて縦横無盡に切りまくる。もとより決死の諸共である  
みら敵兵を斃すことその数を知らず、この勢に乘じて内室は腰から銀の  
米配を取り出して真先きに進んで追ひ破り息もつかぬ有様に味方の兵ど  
もよく戦つたが、多勢に無勢、敵にたたく残り少なく討たれた。内室は  
いまはこれまでなりと宗勝の馬前にかけ向ひ、「如何に宗勝殿御身は西國  
にて名を得た剛の者とみや、吾れ女なれども一勝負仕らん、ここ引き結  
ふな浦野殿」といひさま長刀の劔を水車のように廻し、只一文字に  
切りかかつた。宗勝は遠巡して、「いや、御身罪にもせよ女性の手なれ  
ば相手にはなり申さず、隆徳と勝負を決せん」といふうち横合ひから  
難兵四五十騎ばかりがみかけくるのを長刀を取り進んで七八騎をなぎふせ  
手負はせ、「女こきいぎ結へ人々」と腰の太刀を抜き出し、「これは我家重八の  
國平の名作なり、嘗て家より父家親に進んせし秘蔵なり、父より遣はり置  
ふれは宗勝に進んせん後生郎に結はれよ」といひ持てて城内へ馳せ入つた  
有縁は昔天竺之喜見城を昔に結ひし時に吉祥天女の諸共が修羅を攻め  
た勢もかくやとばかりみる人々は舌を巻かぬのはなみつた。  
かくと西方に向ひ手を合せて「我西方十萬億土彌陀を頼りに恐れず、己

心の彌陀、唯心の淨土、今爰に現はせり佛も如露如電との説の如く、誠  
 に字心の在に幻の身の佛落に宿たる稲妻の早立ち帰る本有の城、南無阿  
 彌陀佛し、と念佛を唱へた力を抜いてのどを差しうつ向いて死んだ。陸  
 徳も西方に向い「南無西方彌陀如来、今日娑婆の苦を逃れ本國に立ち帰る  
 一族の諸共と同じ蓮に迎へ結へ」と念佛し腹十文字に掻き切つて舎弟小  
 七郎が介錯し、その身も自害して相果てた。



松林寺の裏から  
 南方常山を望む

城番に止め留りて全軍を城中に引き揚げた。  
 その後宇喜多氏の臣富川平右衛門秀安が城  
 主になり慶長二年九月六日六十三歳で逝去す  
 るまで在城した。その嫡子戸川達安は徳川時  
 代に初代庭瀬藩主に封ぜられたことは支配者  
 層で詳しく記述して置いた。

○ 板倉の合戦

この合戦は寿永二年(一一三三)の十月、源平の両  
 軍が始めて争い争った地でも合戦した戦いにして  
 即ち平軍の部将妹尾太郎兼康が源守の源軍水  
 曾冠者義仲の部将今井四郎兼平と交戦して敗  
 北憤死した事件である。  
 この主人公の兼康という人物は備中板倉の  
 豪族で保元、平治の戦いに源義朝に仕えて朝敵  
 の汚名を蒙り捕えられて薩摩守忠度に預けら  
 れた。備南都(奈良)の僧兵が平清盛に怨恨を抱  
 き謀叛を企てた時、大和の藤原遠使に任せられ数  
 百騎を

總率して奈良に赴き兼康を威嚇した。僧兵は物の数にもせず討つてその  
 陣所を襲撃して首級六を奪げてこれを獲沢の池のほとりに吊首した。兼  
 康は面白を失いほうほうの体にて京都へ帰った。このころ平家無二の  
 味方となり、清盛に信任せられ備中の妹尾莊の他に多くの領地を授け  
 ていた。嘉應元年(一一三二)に木曾義仲は平家追討の兵を信濃に擧げ、根井小幡太  
 滋野行親等の勇者を参謀として北陸路に進んだ。平家はこれを邀撃す  
 るべく手維盛を総大将とし兼康は平家の五人の一人の部将として出動した。大  
 和の没の交戦で敗戦し逃走中義仲の臣念老二郎成澄に捕へられた。

この戦蹟で有名なのは如賀三郎中ノ國境にある俱利伽羅維摩の窟である。ここに俱利伽羅不動明王の祠堂  
 がある。その名が如賀三郎中ノ國境にあるが、この窟が戦いで義仲は暗殺に牛の角にたたまつて四五百頭を敵陣  
 に放つたので不意打の奇計で死者一万余騎を失ったと傳へられている。

兼康は狩に斬首せられたが、その容貌が奇であったので義仲はこ  
 れを釋して成澄の弟の三郎成氏に身柄は預けられた。義仲は勝ちに乘つ  
 て進み美濃の叔父源行家と協力し総勢六万余騎にて義仲は近江、行家は  
 大和方面から長驅遠撃して殆んど無抵抗、無人の境をゆくが如く京都へ  
 のぼつた。

**ピタ** 家具製作  
 室内装飾  
 本社 工場  
 都窪郡吉備町庭瀬  
 電話(吉備局)三二番  
 岡山営業所  
 電話(岡局)②七七〇七番

書籍  
 雑誌  
 文房具  
**目黒郁文堂**  
 吉備町庭瀬電二一九番